
バカと道化と召喚獣

14日は土曜日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと道化と召喚獣

【Zコード】

Z4633Z

【作者名】

14日は土曜日

【あらすじ】

倉雲陽一は道化師である。いつも笑顔を絶やさず、大道芸やマジックはお手の物。そんな道化の文月学園ライフはどんなものになるのだろうか？

プロローグーとある道化師

道化は笑う

皆に笑ってほしいから

道化は芸をする

人を楽しませたいから

道化は腕を磨く

笑顔が見たいから

道化は欺く

それも芸のうちだからと笑って

道化は道化を演じる

自身の悲しみを胸に

これはある道化の少年とその周りの仲間達の物語

いつもおどけてみせる道化

いつも騒がしくて個性的な仲間達

これは彼らが創る物語

いつたいどんな物語なのだろう

楽しい学園コメディ？

ハートフルなロマンス？

空想に心躍るSF・ファンタジー？

まだどんな物語なのかは分からぬ

ただ

一つだけ言えるのは

平穀とはほど遠いところとだけだ

クラス分け

Good morning ミスター！！

少年、倉雲陽一は満面の笑顔で校門に立つ鉄人こと西村教諭に挨拶をする。

一 お、倉雲かおはよう

「?ミスター、その箱はなんデスか?」

陽一は鉄人が抱えている箱に興味を示す。

「ああ、この間の振り分け試験の結果だ。ほら、お前の分だ」

「ああ！あれデスね！わざわざありがといフジヤーいマース・・・といつても、結果は分かつてマスが」

陽一が受け取った封筒。

その中には一枚の紙。

『倉雲陽一 Fクラス』

「まったく・・・。お前も奇特な奴だ。わざわざ試験口にまで仕事を入れるなんてな」

「ゲストのリクエストに応えるのがプロというもののデスヨ、ミスター。それに、あの幼稚園の子供達は楽しみにしていたそうデスから

「

「まあ、あまり学業を疎かにするんじゃないぞ」

「ハイ、ミスター」

校舎の方へと駆けて行く陽一。

鉄人がその背中を見送ると、丁度チャイムが鳴つた。

Fクラス

「皆さんの、おはようございます！」

Fクラスに着くと、陽一はボロボロのドアを勢いよく開けて挨拶をする。

「倉雲？ 何でここに…って、そういえばお前、振り分け試験を受けていないんだったな」

陽一に話しかけたのは教壇に立っていた赤髪の少年、坂本雄一。

はじめは驚いた様子だったが陽一の欠席を思い出したらしい。

「おや？ 坂本くん、なぜそんなところに？」

「ああ、俺がこのクラスの代表だからな。それに、まだ先生が来ないからこっして立っていたんだ。倉雲、席は決まってないから好きに座れよ」

「そうデスか～。面白くなりそつで何よりデース！」

陽一は笑いながら適当な席に座る。

「お、陽一。お主もFクラスなのじやな」

陽一が席に座ると今度は隣に座っていた、女と見紛つほどいの、とうかそつとしか見えない程の美貌の持ち主、木下秀吉が話しかけてくる。

「相変わらずじやなお主は。ワシは木下じやと何度一

「Sorry ミス・木下！」

「さじのこみで田舎」

秀忠はおどけてみせる陽一にため息をつく。

秀吉が女と闇違われぬ口とを逆用にとられたよへである。

他には誰かしヽズか?」

「ワシと雄一の他に、ムツシロー や 鳥田がいるぞい。あと、まだ来ておらぬのじゃがー」

「すいません、ちょっと遅れちゃいました」

秀吉の予想、というより確定事項なのだが、観察処分者が教室に現れた。

自己紹介

明久が遅刻して来て五分後、Fクラス担任である福原教諭がやつと到着。

雄一と明久を席に着かせると出席確認がてらに自己紹介を始める」と。

演劇部に所属している秀吉（一）のとき、陽一と雄一以外の男子は目を輝かせていた）から始まり、盗聴・盗撮を得意とするムツリ商會の主催者土屋康太、明久にさつそく衝撃を与える自己紹介をした島田美波と続いていつて一列目が終わり、陽一の番となつた。

「ボクは倉雲陽一といいマース！アメリカ生活が長かつたので片言デスが、日本語OKデース。特技は大道芸、マジック全般で、たまに営業の方もやってマスヨ！」

変わらず笑顔で言う陽一。

『んじゃあ、何かやつてみてくれよ』

『あ、俺も見たいな』

Fクラスの面々から口々にリクエストの声が。

「OK！リクエストありがとうございまス！それでは・・・豊臣クン、Stand up please！」

「ワシか？」

陽一は全員を見渡したあと、何か思いついたのか隣の秀吉を指名して、立たせる。

「それでは今回はマジックをお見せしマスヨー。」

「そう言つて陽一はどこからともなく一枚の大きな黒い布を取り出す。

「さて、この布をすっぽりと豊臣クンに被せちゃいまーす！」

「？な、なんじゃ？」

「まあまあ、そのまま動かないで。それではnext……十屋

クン、こひらへ！」

「……何だ？」

陽一は秀吉を待たせると今度は康太を呼ぶ。

「ボクがカウントダウンをしマスから、ゼロになつたらこの布をめくつてくだサーカー！」

「？」

康太は何の意味があるのか分からず首を傾げながらも秀吉を覆う布を掴む。

「――――――皆サン、それではいきマスヨー――3、2、1……。0――」

陽一が〇を言うのと同時に康太が布を取り去ると

ପାତ୍ରାବ୍ଦୀ ୧୦୦

・・・・・
（ブシャアア）

「な、なぜじやああああ！」

先ほどまで制服姿だった秀吉がチャイナ服姿となっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4633z/>

バカと道化と召喚獣

2011年12月15日22時47分発行